

れん君とふししまなめがね





②チル登場！

冷蔵庫を開けると、れん君は小さな女の子を見つけました。

演出ノート

れん君 「僕を呼んだのは君？」

びっぴー

チル 「そう、私は『チル』。いつもは冷蔵庫の中で食べ物や物を冷やして、バイキンが増えないように見張っているの。

でも、お肉が台所におきっぱなしになっているから、がまんできなくて声をかけたの。」

れん君 「へえ、そうなんだ。」

不思議そうな感じで

チル れん君は不思議そうな目でチルをみています。

「実はね、お肉のまわりにはもともとバイキンがついているの。

この『ミラクルめがね』をかけてみて。

ほかの人には見えないめがねなの。お肉についたバイキンがどんどん増えているのがわかるわよ。」

【びっぴー】





③ミラクルめがねをかけたれん君。するとお肉にバイキンがたくさん！

ミラクルめがねをかけたれん君、置きっぱなしの肉のまわりになんだか黒いものがたくさんいるのをみつけました。

れん君

「これはなあ〜に?」

チル

「これがバイキンよ。バイキンがれん君たちの体に入ったら悪さをして、おなかが痛くなったり、熱が出たりするのよ。」

れん君

「うわ〜!バイキンがいっぱい!たいへんだ〜!」

バイキン

「ど〜んどん、ど〜んどん増えてやる〜!いっぱいいたずらしてやるぜ〜!ど〜んどんど〜ん、ど〜んどんど〜ん!」

バイキンたちはさわぎながら、仲間をどんどん増やしています。

れん君

「チル、どうしよう・・・。」

チル

「私は、バイキンがこれ以上増えないように冷やして眠らせることができらわ。だかられん君、急いでお肉を冷蔵庫に入れて!」

れん君

「うん。わかったよ。」

そういうと、れん君はお肉を冷蔵庫に入れました。

【線までぬく】

演出ノート

リズムに乗って

とまどった感じで





④チルの冷たい息で、
バイキンたちは
眠ってしまう。

演出ノート

チル 「さあ。バイキンたち大人しくしなさい！」

そう言いながら、チルが大きく息を吐き出すと、冷たい空気がバイキンたちを覆いました。

【おへ】

バイキン

「や・・・さむい・・・。これじゃあ、増えることができないぜ〜」

れん君 今まで騒いでいたバイキンたちは静かになり、みんな眠ってしまいました。

チル 「うわあ〜。チル、すごい〜！」

れん君 「えっへん！こんな簡単な、簡単に！しっかりと冷やしたからバイキンたちを眠らせることができたわ。でも、まだ安心はできないの・・・。」

れん君 「どいっしょ〜」

チル れん君は不思議そうです。

れん君 「バイキンたちは、今は寒さで眠っているけど、冷蔵庫から出したらまた目をさますわ。」

チル 「ええっ・・・。じゃあ、どうしたらいいの？」

れん君 「バイキンは炎の力に弱いのだ。」

チル 「そうか！お肉をやいちゃえば、バイキンはやっつけられるんだね！」

チル 「正解！」

チル その時、れん君を呼ぶお母さんの声がしました。

チル 「じゃあね、れん君」

そう言うのと、チルは冷蔵庫の中へ消えてしまいました。

【おへ】

ふんふんた感じ



おしえて
10°C以下

牛乳

牛



⑤楽しいバーベキューの始まり。
バイキンが炎の力でいなくなっていく。

家族で楽しいバーベキューが始まりました。

れん君が、ミラクルめがねをかけてお肉を見ているとなんだかバイキンたちがさわいでいます。

バイキン

「やばいよやばいよ。あついよ。やられちゃうよ。」

れん君

「うわっ！炎の力でバイキンがどんどんいなくなっている！

チルの言ったとおりだ！」

その時です。炎の中から何かが飛び出しました。

【8】

演出ノート

あせった感じで





⑥ファイの登場。

ファイ

「やあ、れん君。僕の名前は『ファイ』。炎の使いさ。バイキンなんか、僕の手でいちごころさー!」

れん君

「そうか! バイキンがどんどんいなくなっているのはファイの手なんだね。」

ファイ

「あーそうさ。僕は炎の手で食べ物をおいしくするだけじゃなくて、バイキンをやっつけてみんなを守っているのさ。」

ファイは得意げです。

お母さん

「まあ、お肉が焼けたわよー!」

お母さんはそう言いながら、れん君のお皿に焼けたお肉をのせてくれました。

れん君

「おいしいね。僕、バーベキュー大好きっ!」

れん君はおいしそうに焼けたお肉を食べています。

お父さんが、お肉を食ぶようと箸をのばしたその時です。

【へ】

演出ノート

自信満々に





⑦お父さんが箸をのばしたお肉にバイキンがついているのを発見！
ファイアーパンチをおみまいする。

ファイ

「危ないっ！そのお肉はまだ焼けてない。中が赤色だ。」

ほらっ！バイキンがまだついてるぞー！」

バイキン

「しまった・・・見つかった。」

ファイ

「逃がさないぞ。バイキンめ！こいつをくらえ！ファイアーパンチ！」

バイキン

「うわーやられたー。」

炎のパンチを受けたバイキンは、遠くへ飛んでいきました。

れん君

「ファイ、お父さんを助けてくれてありがとう！」

ファイ

「どういたしまして！これくらい、なんてことないさ。お肉は中までじっから焼くことが大事なんだ。そうじゃないと、バイキンをすべてやっつけることはできないんだ。」

れん君

「うん、わかった。僕、気をつけるぞー！」

そしてバーベキューが始まってから時間が経ち、炎も小さくなってきました。

【線おめでとう】

演出ノート
ヒーロー風に

ゆるゆるゆるゆるゆる





⑧お肉にバイキンがついているのを発見。バイキンにファイアーパンチをおみまいするが…。

れん君 「あれれ?」

れん君は不思議に思いました。お肉のバイキンが、なかなか消えないのです。

れん君 「ファイ! お肉についているバイキンたちをやっつけて!」

ファイ 「オッケー! 僕にまかせて!」

ファイは、そう言ってバイキンめがけファイアーパンチをおみまいしました。ところが、さっきと様子が違います。

バイキン 「そんなパンチじゃ俺たちをやっつけることなんて、できないぜ!」

バイキンはピンピンしています。

ファイ 「しまった・・・、炭が足りない。炎が弱くなって、ち・・・ちからが出ない・・・。

れん君、力を貸してくれないか?」

れん君 「どうしたらいいの・・・?」

ファイ 「炭を足してほしいんだ・・・。」

れん君はお父さんといっしょに急いで炭を足しました。

【<8>】

すると、バーベキューの炎がぐんと強くなりました。

ファイの力が、メラメラ湧き上がってきます。

「れん君、ありがとう!」

ファイ そう言いながら、バイキンに向かってひとつ飛び。

【<8>】

演出ノート

自慢げに

よわよわしい感じ





⑨ファイの力が
パワーアップ、
ファイアービーム
でやっつける。

ファイ

「僕の必殺技をうけてみる〜！ファイアービーム！」

ファイのビームは、バイキンに命中しました。

バイキン

「うわっ！なんてすごい力だ・・・。」

バイキンは、あっという間に消えてしまいました。

れん君

「ファイ、やったね！ありがとう」

ファイ

「れん君たちの協力があったから、バイキンたちをやっつけられたんだ。

ごさびごさお礼を言うよ。」

【<8】





⑩ファイとの別れ

れん君

「僕、このミラクルめがねのおかげで、よくわかったよ。バイキンたちが悪さをしないように、チルやファイが守ってくれているんだ。僕たちが元気でいられるのは、冷蔵庫や炎の力のおかげなんだね。」

ファイはれん君の言葉を聞いて安心しました。

ファイ

「れん君、僕もう行かなくちゃ。じゃあ。」

そう言いながら、ファイは炎の中に帰っていきました。

そして、気がつくとれん君がかけていたミラクルめがねも消えていました。

れん君には、もうバイキンたちは見えなくなっていました。

でもれん君は平気です。

だって、ファイとチルに大事なことを教わったから・・・

【おしま】



HACCP



①バーベキューを 楽しみにしながら、 台所へお母さんを 探しに

題名：「れん君とふしぎなめがね」

登場人物

れん君……しっかり者で好奇心旺盛な5歳の男の子。

お父さん……れん君のお父さん。

お母さん……れん君のお母さん。

チル……冷気の妖精、なんでも冷やすクールな女の子。

ファイ……炎の妖精、なんでも焼いてしまう熱いヒーロー。

バイキン……時にはおなかを痛くする悪いやつ。

れん君とふしぎなめがね 10場面

平成26年9月発行

●発行 兵庫 県

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1

TEL 078-341-7711(代表)

※この紙芝居を無断で複製・転写することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

演出ノート

れん君は、元気な5歳の男の子。
今日も外でいっぱい遊んで、おなかをすかせておうちに帰ってきました。
「ただいま〜！ お母さん〜」

れん君
「ただいま〜！ お母さん〜」
おや？ 返事がかえってきません。

ふと台所の上を見ると、あれれ……お肉がおきっぱなしになっています。

れん君
「あれっ？ 今日のパークのお肉かな……」。

そういいながら、お肉のパックを触ってみると、

いつもだったら冷たいはずのお肉が、冷たくありませんでした。

れん君
「いっしょにおいであるんだろう……？」

その時です。

チル
「ねえ！ れんくん！ ねえってばー！」

れん君
「ん？ 誰か僕のこと呼んだ？」

チル
「いっしょにおいで！」

「いっしょにおいで」の声は冷蔵庫の中から聞こえてくるようです。

【さし】